

フランチェスカ・トリヴェッラート「二十一世紀における歴史をめぐる新たな闘い」

Francesca Trivellato, “A New Battle for History in the Twenty-First Century?”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 261-270.

紹介

デイヴィッド・アーミテイジとジョー・グルディは、ミクロな歴史学の台頭により歴史研究に長期の視点が失われたことを批判し、そこにこそ歴史家が公的な役割を失った原因があると指摘した。それに代わり彼らが提唱したのは、ビッグデータの分析を利用した「長期持続」への回帰であった。今回紹介する論文は、この問題に関するアナール誌特集号に掲載されたトリヴェッラートの応答である。

○導入部

- ・デイヴィッド・アーミテイジとジョー・グルディは、フェルナン・ブローデルが提唱した「長期持続」(*longue durée*)に立ち返ることで、アカデミックな歴史学を意義あるものにするのが急務であると主張している¹。
- ・彼らの考察は分析と提言に富んでおり、アカデミックな歴史研究の意義を取り戻すにはどうしたらよいかという困難な議論に、歓迎すべき貢献をなしている。
- ・さらに彼らの議論は、ブローデルの「長期持続」という概念がもつ意義と価値についての問いを投げかけている。

○「1968-2008 年をどう解釈するか」(How to Interpret the Years 1968–2008?)

- ・アーミテイジとグルディにとって、1968 年から 2008 年までの時期は、英語圏の歴史学における「道徳的危機」を象徴している。なぜなら、この 40 年間に歴史家たちは「現代のグローバルな問題やオルタナティブな未来について発言することから、内向的になり、ほとんど盲目的に遠ざかってきた」からである。
- ・こうした評価の前提になっているのは、この時期の歴史学に支配的だった「ミクロへの注目」と、歴史家が「政策の助言者、国家的・国際的あるいは市民的・社会的協力の予言者としてのかつての役割」を放棄したことに因果関係があるということである。
- ・アーミテイジとグルディの言葉でいえば、「短期の歴史」は、「歴史家以外の人びとはい

¹ 「彼らの議論には邦訳がある。デイヴィッド・アーミテイジ、ジョー・グルディ（平田雅博・細川道久訳）『これが歴史だ!——21 世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017 年」。

- うまでもなく、周辺の学問分野にも限られた影響しか与えることができなかった」。
- ・その代償は、公共の議論に対する歴史学の貢献という観点から見ると、さらに大きいものになる。1970 年代後半以降、歴史家は「高い塔の上にいる天文学者となり、政治的・経済的な状況からは距離を置いている」、つまり周囲の世界から切り離された憂鬱な人物になってしまった。
 - ・しかし、アーミテ이지とグルディによればすべてが失われたわけではない。英語圏では、こうした既成の習慣を打ち破る歴史家がますます増えてきている。彼らは再び、何千年とは言わないまでも、数世紀という範囲をカバーするようになってきている。また、環境科学や生命科学など、自分たちとはかけ離れた分野にも真剣に取り組んでいる。さらに、オンライン・データベースやコンピュータ分析のための新しいツールの可能性をますます開拓しているのである。
 - ・こうした新しい傾向に対する楽観的な見方と、過去に対する悲観的な見方は、心の琴線に触れるものがある。歴史家（ほとんど男性であるが）が政治や公共の場で今日よりも英雄的な役割を果たしていた時代の描写には、深いノスタルジーがある。
 - ・アーミテ이지とグルディによれば、歴史家が自分の繭の中に引きこもれば引きこもるほど、経済学者が国内の政治問題や政府・非政府の国際協力機関の助言者として歴史家に取って代わるようになった。
 - ・1980 年代に入ると、この流れはもはや止められないように見えた。
 - ・この変化は紛れもない事実であり、アーミテ이지とグルディはこの変化にスポットライトを当てることで私たちに貢献している。
 - ・今日、一般的なメディアで新自由主義について語るアカデミックな声は経済学者のものだけである（そのほとんどが肯定的で、批判的なものはまれ）。しかし、彼らもシンクタンクの専門家や経済界の大物の影響力に押されつつある。
 - ・アーミテ이지とグルディによれば、この変化の責任は明らかに歴史家の陣営にあり、歴史家には関わりを持たないことを選択した罪があるという。
 - ・共通の文化的慣習が形成されるコンテキストについて考えることに慣れているこの二人の歴史家が、〔そのようなコンテキストを無視して〕こうした推論をおこなったのは驚くべきことである。
 - ・彼らの主張においては、1980 年代に歴史学の地位に影響を与えた外的要因の検討は放棄されているか、あるいは歴史家の選択を告発することに比べてわずかし論じられていないのである。

○「ミクروسケールは最小限の影響しか与えられないのか」(Is the Micro Scale Condemned to Have a Minimal Impact?)

- ・アーミテ이지とグルディの考えでは、歴史家が数年や数十年ではなく、数世紀や数千年を研究対象とすべき第一の理由は、教養層、政策立案者、国際機関に影響を与えるためである。
- ・しかし、ミクロスケールの歴史研究がすべて政治的な領域から切り離されているというのは本当だろうか。
- ・これには重要な反例が存在する。ロバート・パクストン、ベニー・モリス、ヤン・グロスの研究は、わずか数年に焦点を当てた本を書くことで、それぞれフランス、イスラエル、ポーランドの国民意識を揺さぶった²。
- ・逆に次のような疑問が生じる。「長期持続」の歴史解釈が政治家やより広く英語圏の人びとに響くのは、その年代的な幅広さのためなのか、それとも特定の主張のためなのか。
- ・後者として念頭にあるのは、例えば、西洋の優越性を遠い時代にまでさかのぼって立証し、それとは逆に、イスラム世界を硬直した伝統主義と反民主主義の傾向を持った「長期持続」の中で描く研究である³。
- ・アーミテ이지とグルディによれば、短期に焦点を当て「アーカイブの集中的な使用」に依存する歴史研究は、長期に焦点を当てた研究と比べて、「最小限の論文」(“minimalist theses”)しか生み出していない。
- ・しかし、こうした結論は正当なものだろうか。
- ・例えば、1970年代後半に、デイビット・ハーリヒーとクリスティアーヌ・クラピシュ＝ズベールは、フィレンツェの「土地台帳」(catasto)に関する先駆的な研究『トスカーナ人とその家族』を刊行した⁴。この研究は、一つの年に焦点を当て、一つの記録を徹底的に読み取るというものだった(コンピュータの助けを借りて)。
- ・この研究は、1950年代後半から1960年代前半にかけて、ジーン・ブラッカーやラウロ・

² Robert O. Paxton, *Vichy France: Old Guard and New Order, 1940–1944*, New York: Knopf, 1972; Benny Morris, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem, 1947–1949*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987; Jan T. Gross, *Neighbors: The Destruction of the Jewish Community in Jedwabne, Poland*, Princeton: Princeton University Press, 2001; Gross, *Fear: Anti-Semitism in Poland after Auschwitz: An Essay in Historical Interpretation*, New York: Random House, 2006.

³ David S. Landes, *The Wealth and Poverty of Nations: Why Some Are So Rich and Some So Poor*, New York: W. W. Norton, 1998; Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Simon & Schuster, 1997; Bernard Lewis, *The Crisis of Islam: Holy War and Unholy Terror*, New York: Modern Library, 2003.

⁴ David Herlihy and Christiane Klapisch-Zuber, *Les Toscans et leurs familles. Une étude du catasto florentin de 1427*, Paris: Presses de la FNSP/EHESS, 1978; abridged English edition: *Tuscans and their Families: A Study of the Florentine Catasto of 1427*, New Haven: Yale University Press, 1985.

マルティネスのようなアメリカの歴史家により始められた、イタリア・ルネサンスの社会史の大きな潮流に属していた。

- ・これらの研究の対象はときにきわめて小さかったが(一つの近隣関係や職能集団といったように)、歴史学の議論に与えた影響は非常に大きかった。
- ・そうした個々の研究やそれらの累積が及ぼした影響は、「近代性」という物語に疑問を投げかけ、世界史の教科書におけるルネサンス期のイタリアの位置を劇的に変えたのである。

○「ブローデルへの回帰、しかしどのブローデルか」(A Return to Braudel, but Which Braudel?)

- ・アーミテイジとグルディは、近年アカデミックな歴史家が長期の時間をカバーするようになってきたとして、ブローデルの「長期持続」とのつながりを指摘している。
- ・この概念は、特に 1958 年のブローデルの論文「歴史と社会科学」で特徴づけられたものであり、それ自体が人文科学や社会科学における一般的な危機感への応答であった。
- ・もちろん、「復活した「長期持続」が元の姿と同じではない」ことを彼らは認めているが、ブローデルの定式化との境界線は明確ではない。
- ・ブローデルは『フィリップ 2 世時代の地中海と地中海世界』で初めてこの言葉を使用し、その三つの特徴を具体化した。

①「長期持続」は、他の時間概念〔「中期持続」と「短期持続」〕から孤立しているのではなく共存している。

➡アーミテイジとグルディは、これら三つの時間概念の関係についてはブローデルほどに関心がない。

②「長期持続」は、非常にゆっくりとした変化のプロセス（多くは、気候や環境によって決まる）を意味するだけでなく、周期的な時間でもある。

➡アーミテイジとグルディは、この性質にやや付随的な形で言及しているだけで軽視している。

③「長期持続」は、政治史の優位に対する解毒剤としての論争的な性質をもっていた。

➡アーミテイジとグルディによる「長期持続」はこうした性質を失っている。

- ・彼らは「長期持続」の意味を何十年、何百年、あるいは何千年を覆う時間的尺度に変え、ブローデルとの人工的なつながりを作っているだけである。
- ・ブローデルによる時間の三分割構造を単なる「長い時間」としての「長期持続」という概念に同化させることの利点は疑わしい。
- ・時間的な変化について書く場合、時間性をどのように概念化するかについて真剣に考

察した歴史家はほとんどいないし、時間を分析の基本的な枠組みとするまでに至った歴史家はさらに少ない。

- ・ブローデルが、人間社会、動物、環境の相互作用を理解するのに役立つ多重的な時間概念を構築したことは、彼の並外れた功績である。彼が制度的・知的な選択をおこなったことと、彼の著作が受け入れられたことによって、「長期持続」はブローデルの三部構造の主要な遺産として浮かび上がることになった。
- ・イタリアのミクロストリアの歴史家は、「長期持続」の帝国主義的な印象にもっとも強く反発した歴史家たちであった。
- ・しかし、ブローデルもミクロストリアの歴史家たちも、自分たちの関心が「長期持続」や「ミクロスケール」そのものではないということを常に強調していた。ブローデルが魅せられたのは複数の時間の組み合わせであり、ミクロストリアの歴史家たちが魅せられたのは複数のスケールの分析であった。
- ・双方のアプローチを批判する人たちは、複数の時間性や異なる分析視点を統合することに利点があることを認めても、そうした原則には限界があるとすぐにあきらめてしまう。今こそ、どちらかの陣営にとどまるのではなく、まだ果たされていないこの約束を実現するときではないだろうか。
- ・時間概念の三分割は、すべての人文科学・社会科学の中心にあるもっとも悩ましい二つの問題について考えぬこうとしたブローデルの最初の試みだった。すなわち、①行為主体性と構造との関係、②物質的構造と「心性の枠組み」との関係である。

○「短期の歴史と長期の歴史にはどのような未来があるのか」(What Future for Both Short- and Long-Term History?)

- ・アーミテイジとグルディは、1970年代以降に盛んにおこなわれた、歴史家によるマスター・ナラティブ〔たとえば、近代化論のような〕の批判がきわめて有害な影響を与えたと考えており、長い時間をカバーできる歴史学を再構築する可能性をもっと大胆に肯定するよう呼びかけている。
- ・しかしながら、彼らの情熱的な訴えには、彼らが主張するような「長期持続」の歴史を作り出すための道具を、アカデミックな教育がどのように提供できるかについての具体的な提案が欠けている。
- ・アーミテイジとグルディは、歴史家が公的な役割を経済学者に委ねてしまったと叱咤しながらも、歴史家が統計学に精通して大きなスケールの比較研究を生み出せるように提案することは控えている。
- ・しかし、量的分析のスキルではないとすれば、数世紀、あるいは数千年にわたる革新的

な歴史を生み出すためにはどのようなスキルが必要なのだろうか。

- ・これは、個々の歴史家が自分で答えを見つけるべき問題なのだろうか。それとも、学際性の新しいモデルを育むために、大学院や学部がより体系的に検討すべき戦略的決定であるのか。
- ・アーミテ이지とグルディに対するもう一つの疑問は、オリジナルな研究と総合研究〔一次史料をベースにした研究と二次史料をベースにした研究〕の関係についてのもので、これはマクロスケールの歴史を悩ませるジレンマである。
- ・新しいデータベースは、大きなスケールの研究を容易にするものもあれば、そうではないものもある。歴史上のほとんどの時代と場所について、私たちの事実的な知識は不完全で大いに議論の余地がある。このことは、信頼性の高い新しい総合研究を志す人や、単に広大な時間をカバーする研究をおこなう人にも当然影響を与える。
- ・最後に、選択によるものか必然なのかはわからないが、数世紀あるいは数千年をカバーする歴史のほとんどは、過去半世紀にわたってアカデミックな歴史家が反発してきた単一原因的な説明を採用する傾向がある。

○結論

- ・結局、アーミテ이지とグルディは、私たちにどのような「長期持続」の歴史を書かせようとしているのだろうか。もし、彼らが曖昧なままであるとすれば、それは、包括的なプログラムを提供するのが大変な仕事であるというばかりでなく、おそらく人文科学や社会科学の他の分野よりも歴史学を特徴づける、方法論的多元主義に反しているからである。
- ・この方法論的多元主義は、常に歴史家の仕事の強みであり弱みでもある。
- ・100年前は、このことがアーミテ이지やグルディが賞賛するような歴史家の公的な役割を支え、歴史学がジェントルマン教育の中で安定した地位を確保することに役立った。今日でも、方法論的多元主義は、自然科学や社会科学のヘゲモニーに対して、多くの創造的な反響を引き起こしている。
- ・しかし、それは科学が支配する時代において、伝統的な歴史学の認識論的地位を損ない、公共の場や政策決定における歴史家の威信を損なっている。
- ・このパラドックスは、歴史記述の危機と活力の両方の核心をなすものであり、つぎのような問いについて考えるときにこのパラドックスはいっそう切実なものとなる。
- ・つまり、歴史学は他の学問分野との橋渡しをどのような基盤に基づいておこなうのか、また、マスター・ナラティブの破綻と、歴史家が「有用な過去」(usable past)を作り出すという政治家や教養層の期待をどのように和解させればよいのか。